会　議　録　要　約

会議の名称	令和５年度第２回八尾市社会福祉審議会高齢者福祉専門分科会
開催日時	令和５年11月７日（火）　午後２時００分～午後４時００分
案件	議事 ・第９期八尾市高齢者保健福祉計画及び介護保険事業計画の策定について

第９期八尾市高齢者保健福祉計画及び介護保険事業計画素案（概要版）について	
委員	重点方針の３つと基本施策５つの関連性について教えてほしい。
事務局	基本目標の副次目標「１人で悩まない、地域で支え合う、地域共生社会の実現」を達成させるために重点方針を定めています。また、重点方針の「地域の中で支え合う仕組みの充実」は、基本施策１．認知症対策と高齢者の権利擁護の推進、２．見守りネットワークと相談体制の強化に対応し、「健康づくりの推進」は、３．健康づくりと介護予防の推進、４．社会参加の促進に対応し、「持続可能な介護保険制度の推進」は、５．介護サービス基盤の整備に対応しています。
会長	第９期計画の見込み量の策定についての根拠を教えてほしい。
事務局	第９期計画の令和６年度から令和８年度の各事業の見込量については、第８期計画の事業実施状況を踏まえ、市の総合計画とも整合性を合わせ設定しています。
委員	「地域の中で支えあう仕組みの充実」の中に高齢クラブも入っているが、近年会合に出ることや、会費を払うのが負担だということで加入率が下がっている。高齢クラブでは、年2回、会員に対して訪問を行った。クラブのイベントに出てこれる人、出てこれない人がいる。出てこれない人にどこまで踏み込んで話を聞けるか、個人情報の縛りもあり踏み込めて話を聞けない場合もあった。イベントとして例えば、毎月ボーリング大会を行っているが、そのイベントを通じて「あの人最近来ないけどどうしたんだろう」というような、お互いの安否確認にもなっている。家から出て来ない人とのつながりが大事と感じる。
委員	アウトリーチについて、高齢クラブや自治会に入っていない高齢者は、実際に各種アプローチを受けていない場合もある。そのような方に対して、本人の個人情報をどこまで伝えて良いのかも含めてどのような対応をすればよいのか教えてほしい。
副会長	自治会等未加入の方々に対して、民生委員が漏れなく全てアプローチできる訳ではないし、地域包括支援センターの認知度の課題もある。アウトリーチも大切だが、効果的な手法についての検討が必要。
委員	同じマンションでも関わりが少ない人に対して、どのような機会があり、どのように関わればよいのか迷う部分がある。
事務局	関わり方に迷う場合は、高齢者あんしんセンターに事情を伝え、つなげていただければ相談させていただきます。
事務局	新型コロナウイルス感染症の真っ只中に、特別定額給付金の申請がまだの人に対して、市の職員で訪問したが、高齢者はほとんど申請しており、高齢者の地域のつながりは強いと感じた。
委員	発足当初は認知度の低かった高齢者あんしんセンターも、これまでの地道な努力で100%ではないが地域には浸透してきている。ただし、まだまだ存在を知らない方や、つながりのない方がいることは事実であるため、できる限り安心した生活を送っていただくためにも、よりPRが必要。 高齢者実態調査は、質問が多く、回答者側の負担軽減について検討してほしい。

委員	「介護予防」「フレイル予防」「認知症予防」など、少し前までなかったような名前も出ているが、フレイルが介護予防とようやく分かってきだした。
会長	新しい言葉「フレイル」をどう知ってもらうか、どういうところがポイントになるか、周知することが重要。
委員	八尾市には事業者連絡協議会に加入している約200法人があり、特にグループホームは他市よりも割合が多い傾向にある。グループホームを相談窓口として計画に記載したらいい。グループホームも認知症に対する専門的な相談窓口になり得るし、地域の相談窓口としてサービス提供事業所の現場が相談窓口機関の一つとして活用してもらいたいという思いがある。
委員	医療と介護の連携について、介護現場でも医療ニーズが多くなってきており、特に在宅では医療との垣根が高い傾向にある。医療と介護が連携できる機会の確保をしてほしい。また、地域密着型サービスの充実も必要と考える。 多床室の多い特養は、感染症のクラスターが起こりがちだが、ユニット型の地域密着特養はクラスターが起こる率が低い。
委員	介護人材の確保について、計画書にはもう少し具体的な取り組みを記載していただきたい。 例えば、人材確保の啓発に市の支援などはできないか。また、人材については地域でまかなえるような方向に持っていきたい。人材育成、福祉教育、就職フェアの支援なども市が積極的に関わってほしい。
会長	新型コロナウイルス感染症での対応の経験を活かす。災害時の避難計画などについて触れているが、自然災害だけでなく、コロナなどの感染症のことも含めて災害対策として、計画に盛り込んではどうか。
会長	意見の出た医療介護をはじめとした各種連携づくり、人材確保・人材育成について、着実に実行に移していただきたい。
委員	高齢者への声掛け等がきっかけとなって相手の状況を把握できる。そこで異常を感じれば地域包括支援センター等へつなげることもできるが、一方で「介護を受けたくない」「他者との関わりを積極的に持ちたくない」といった方もいるため、そのような方をいかに支援につなげるかが重要。
副会長	今後どのような形で情報発信を推進していくのか。ＳＮＳが当たり前になっている中で、それを使えない人が取り残されているという現実がある。情報取得が苦手な方や個人情報の問題など様々な課題がある中で、結局は「人と人」のつながりが大切な面がある。 そのような課題に対して、「八尾市では特別にこのような動きをしている」といった内容を、第９期計画の動きとしてどこまで記載できるか。
副会長	看取りケア研修を例として挙げるが、「おそれずに生活支援を」というメッセージを伝えると介護職員をはじめとしたスタッフも安心する。声を掛ける側の人間も含めて「安心して報告･相談していいんだよ」という意識改革をできるような、後押しや支援が大切となる。その中ではボランティアの存在も重要となってくる。

委員	ボランティア連絡会でのフレイル予防教室で、今年に入って今まで参加していなかった人が非常に多く参加する傾向にある。 参加者に話を聞いてみると今まで活動を知らなかったと答える方が多く、これまでは「ほぼ外出しない」「話し相手もいない」「家でテレビばかり」という答えも多く聞かれる。 各種イベントの参加者が固定化される側面があるものの、まずは外出することが第一、そのうえでできる限り様々な方との会話を行う機会を増やすことが大切である。ボランティアが活動できる範囲を広げてもらいたい。 友達同士だけでなく他人との会話も必要。市には外に出る人・出ない人の差を埋めていくための支援を、できる限り目線・視点を下げたうえで実践していただきたい。

副会長	ボランティア活動などは人とのつながりにおいて非常に重要な機会となる。
委員	ボランティア活動の素案の記載について、より具体的に説明のうえ、市民に理解してもらえるような工夫をお願いしたい。
委員	地域住民間での地域力、市民力が低下していると感じる。素案の地域の中で支え合う仕組みの充実に、もっと多様な人がかかわる組織も含んではどうかと思う。事業所や社協もここに書いてもらってはどうか。自分の地域では高齢者が多く交通不便地でもあるので、まちづくり協議会で「あいらぶ自動車」という送迎サービスを行っている。私も運転手としてかかわっているが、その時に、利用された方が、「日頃テレビを見ているだけで人と話す機会がない。今日、2日ぶりに人と話した。」と言っておられた。認知症予防、介護予防に人と話すことは非常に重要だと思う。地域にかかわる担い手が入りやすい機会があることが重要。
副会長	意欲のある人が動いているが、次の担い手が課題。